石村雅幸
巨樹に魅せられた画家

樹齢数百年はあろうかという
日本各地の巨樹ばかりを、
約四半世紀にわたって描き続ける
日本画家、石村雅幸。
彼を突き動かしている巨樹の魅力とは？

撮影　本田武士

今年の秋の院展（再興第109回 院展／9月1日～16日　東京都美術館）の入選作《纏う》を制作中の石村。題材は千葉県印西市の松虫寺門前にあるスダジイの巨樹。樹皮、葉の一枚一枚、まとわりつく植物など、細部にわたって丹念に色を重ねてゆく。

巨樹に魅せられた画家

田園風景が広がる茨城県の利根町を拠点に、約四半世紀にわたって巨樹ばかりを描き続けている異色の日本画家がいる。石村雅幸（59）。高校時代に山口華楊の作品に感銘を受けて画家を志し、玉川大学で日本画を修得。卒業後は歴史画や人物画で名をなした森田曠平、そして伊藤髟耳に師事して、室生寺や平等院鳳凰堂など古建築をモチーフに作品を描いていたという。

そんな石村が巨樹を描くようになったのは35歳の時。「10年続けて入選していた院展に落選したんですね。これは良い機会だ、新たなテーマを見つけようと思いました。その時期に出会ったのが茨城県の玉造町にある西蓮寺の大イチョウ。圧倒され、これだ！と感じたんです」。以後、来る日も来る日も巨樹と向き合う日々が続き、25年の月日が過ぎてしまったという。「巨樹を目の前にして、じっくりと観察していると、1本1本それぞれが意思をもってこちらに語りかけてくるように感じるんです。悠久の時を耐えてきた彼らの驚異の生命力に畏怖しながら、それでもその美しい姿を何とかかたちにしたいと思って筆を進めています」。

一つの作品を描くため、時に1カ月も通い詰めて写生するという石村の巨樹との禅問答は、これからも続きそうだ。

画室近くにある古社「蛟蜩（こうもう）神社」にて。これまでに何度も描いてきたイチョウの御神木を見上げる。

㊤茨城県利根町の画室「雅幸画房」にて。石村が手に取っているのは本画のための素描の数々。写真は一切使わない徹底した現場主義。何度も足を運び、生きた巨樹に向き合い、観察して本画へと導くのだという。

㊨《長閑（ちょうかん）》2013年
紙本着色　215×170㌢
千葉県館山市の十二天神社境内に立つ、樹高17㍍、樹齢約800年の「沼のビャクシン」を描いた大作。2013年の秋の院展（再興第98回 院展）に出品し、奨励賞を受賞した。
㊧今年7月、《長閑》は作品に惚れ込んだジャーナリストの櫻井よしこ邸に飾られることに。圧倒的な迫力の大作を前に語り合う二人。